



障害と身体を めぐる旅

2018



平成30年度かながわボランティア活動推進基金21・協働事業負担金「地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業」
認定NPO法人STスポット横浜、神奈川県福祉子どもみらい局福祉部障害福祉課、神奈川県国際文化観光局文化課

ごあいさつ

STスポット横浜は、神奈川県横浜市にあるNPOです。

「アートの持つ力を現代社会に活かすこと」をミッションに、小劇場「STスポット」を運営する芸術機関として1987年に活動を開始しました。2004年からは地域コミュニティに向けた活動を担う、地域連携事業部を設置し、学校での芸術家による授業の実施や、地域の文化団体支援などを行っています。

福祉分野における芸術文化活動の基盤整備事業は、2015年から開始しました。

2017年度からは、かながわボランティア活動推進基金21・協働事業負担金

「地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業」を開始しました。

この事業は、地域に暮らす障害者が、文化芸術体験活動を通して生活の質を向上させ、社会の中で顕在化することで、障害の有無にかかわらず共生する社会の実現に向けた

基盤整備の一翼を担うことを目的としています。

【ワークショップ実施事業】

神奈川県内の障害福祉サービス事業所等に芸術家を派遣し、施設の希望に応じて

ダンスや音楽、美術等、広範な文化芸術体験を実施しました。

7ヶ所にて、21回行いました。

【調査研究事業】

神奈川県内における障害者の文化芸術体験活動の事例蓄積を行いました。

神奈川県内の障害福祉サービス事業所や文化芸術団体、自治体へヒアリングを行いました。

【コーディネーター育成事業】

文化施設職員を中心にワークショップ事業の成果を共有や養成講座を実施し、

障害者の文化芸術体験活動を支援するコーディネーターを増やし、

県内のネットワーク構築を目指しました。

勉強会を4回、報告会を1回実施しました。

本年もさまざまな風景、表現と出会いました。

この冊子では、旅の様子的一端ををみなさまにお伝えしていきます。

目次

[ワークショップ実施事業]

- 04 のびやか×西井夕紀子（作曲家）
ー「声を重ねる、音に浸る」
- 06 ひふみ×岸野雄一（スタディスト）
ー「身体を流れる音楽」
- 08 リバーサイト泉川のぞみ・ひまわり×ドゥイ（造形ユニット）
ー「五感を使って変化を楽しむ」
- 10 リエゾン笠間×ドゥイ（造形ユニット）、勝見淳平（PARADISE ALLEY BREAD & Co.）
ー「触る、で広がる世界」
- 11 コミュニティセンター・フレンズ、わたぼうし作業所×上村なおか（ダンサー・振付家）
ー「身体に出会い、解きほぐす」
- 12 みどり福祉ホーム×砂連尾理（ダンサー・振付家）
ー「身体と身体で出会う」
- 14 YSK 作業所×岡田智代（ダンサー・振付家）
ー「それぞれの表現を見つける」
- 16 実施を振り返って～ダンスプログラム検討会～
ゲスト：上村なおか、砂連尾理、岡田智代、入手杏奈（以上ダンサー・振付家）

[調査研究事業]

- 18 神奈川県内福祉施設の取り組み紹介
- 21 ヒアリング結果報告

[コーディネーター育成事業]

障害福祉と文化芸術の関わりを考える勉強会

- 22 障害のある人の表現に出会う場
ゲスト：中畝常雄（NPO 法人スペースナナ、「ココロはずむアート展」書記）
石井将隆（カプカブ川和施設長、「ココロはずむアート展」実行委員長）
- 23 身体を通じた対話
ゲスト：砂連尾理（ダンサー・振付家）
- 24 地域のつなぎ手、担い手
ゲスト：原島隆行（横浜市六角橋地域ケアプラザ 地域交流コーディネーター）
中村麻美（地域活動支援センター ひふみ 施設長）
- 25 障害者と芸術鑑賞
ゲスト：林建太（視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ 代表）
関淳一（横浜美術館 主席エデュケーター）

地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業報告会

- 26 地域にひらく、地域でつむぐ
ゲスト：坂倉杏介（東京都市大学都市生活学部 准教授）
入手杏奈（ダンサー・振付家）、安武宗吾（磯子区障害者地域活動ホーム 職員）、
小野亜斗子（ドゥイ（造形ユニット））、今村憲一（リエゾン笠間 主任）



音楽

のびやか×西井夕紀子 「声を重ねる、音に浸る」

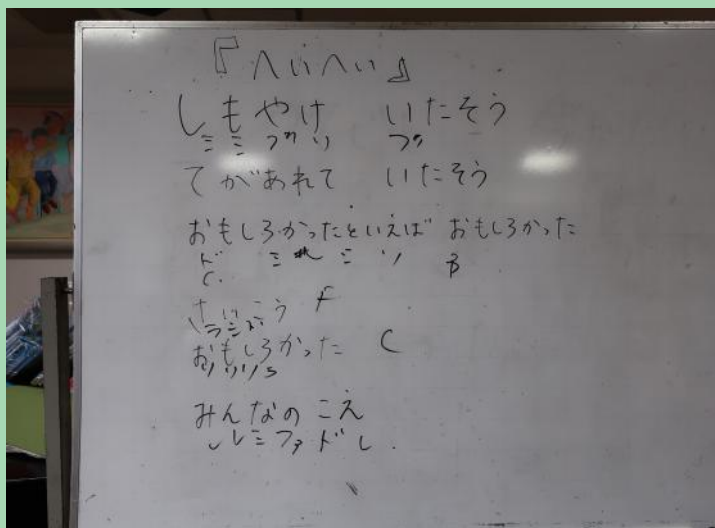
のびやか、相模原市中央区にある生活介護支援施設です。主に知的障害のある40名程度の方が通い、木工や陶芸などの製品づくりに取り組むなど、それぞれのペースで時間を過ごしています。

3階建ての建物の内、1～2階は認定こども園になっていて、今回は認定こども園のホールを借りて実施しました。

普段から音楽に慣れ親しんでいる人もいれば、あまりそういった活動には加わらない人もいます。音楽の楽しさを広げたいということで、作曲家の西井夕紀子さんと伺いました。

誰かが発した声や音を西井さんがすくい上げ、思いもよらない音楽が広がりました。

楽器を鳴らす、歌を歌う、音を聴いて身体を動かす…。人の数だけ音楽との触れ合い方がありました。



1日目 それぞれの音を見つける

会場に到着すると、既に利用者の男性が一人、楽器を鳴らしていました。すかさず西井さんもアコーディオンで加わり、セッションが始まります。開始時間が近づくと、その男性はふだんの活動の場所に戻ってしまいました。西井さんたちの自己紹介の後、好きな楽器を選ぶところからワークショップが始まります。「どんな曲をやりたいか」と西井さんが利用者のみなさんに投げかけ、返ってきた言葉や口ずさんでいたリズムに、音を重ねます。はじめは座って楽器を鳴らしていた利用者のみなさんですが、いつの間にか立ち上がって踊り始めました。後半は好きな曲を募り、西井さんたちが演奏をしました。リクエストした人はマイクを握って熱唱していました。

2日目 みんなの声に耳をすます

今回は録音に挑戦しました。アシスタントの松島さんがシンセサイザーでアレンジを加えてスピーカーから流します。ボイスパーカッションや、口ずさんだメロディ、いつも聞いている仲間の声の流れが流れてくると、歓声があがります。ふだんからICレコーダーで日常の音を録音している人が用意してきた音源を流してくれました。聞こえてきた美しい旋律の正体は電車の発車メロディ。そこにみなさんで楽器の音を加え、素敵な曲が出来上がりました。

■アーティストからのコメント

音楽に心を開き、楽しんでいいと語りかけられた3日間。セッションでは個人のリズムや歌を起点にユニークな響きが生まれていった。ノリノリの演奏の他にも、ふわりと楽器に触れる、音から音へと漂う、常に円の中心にいる、など様々な居方がある。松島さん、欠田さんの音が加わりうねりができると次第にダンスフロアのような盛り上がりを見せた初日。2日目には日頃からフィールドレコーディングをしている方のサンプリング音に加わり、鋭いセンスが空間を満たした。最終日、突然手渡されたメモを歌詞に塩谷さんが歌い、少し涙が出た。(西井夕紀子)

■福祉施設からのコメント

有意義で楽しい時間を送れました。利用者のみなさんのペースに合わせてながら、丁寧でわかりやすく進行していただき、助かりました。それぞれの思いを活かしながら表現できたことが、みなさんの喜びに繋がったように感じます。また、自分たちで歌詞をつけてのセッションやシンセサイザーの音等は新鮮に感じ、ワクワクしました。「音楽を通しての関わり」という素晴らしさを、実感することができました。(小野塚豊治)

その後は機材を実際に触って、音の変化を体験しました。最後にみなさんの今日の感想を繋げて歌を作ります。「しもやけが痛い」と訴える言葉から始まり、その場で西井さんがメロディをつけて、楽しかったひと時を振り返る歌が完成しました。

3日目 歌を楽しむ

最終回は、歌手の塩谷さんがアシスタントに加わりました。前回作った歌を歌ったり、塩谷さんが出した声に続いて歌うことから始まります。西井さんが希望者にマイクを回し、その声から音楽が立ち上がる中で、楽器を鳴らしたり身体を動かしたり、それぞれの楽しみ方をしていました。続いて、「詩でも楽器でも、なんでもありのセッションです」と西井さん。順番に好きな歌を歌っていると、一人の男性が西井さんに手紙を渡しました。そこに書かれていたユニークな言葉に、塩谷さんが即興でメロディをつけて歌います。迫力のある歌声に、みなさん聞き入っていました。最後に、好きな食べ物やテレビ番組が歌詞となった歌もつくり、たくさんの方が生まれた回となりました。

のびやか×西井夕紀子「声を重ねる、音に浸る」

期間：2018年12月11日(火)、2019年1月10日(木)、2月8日(金)

時間：13:30～14:15

参加者：1日目：10名、2日目：15名、3日目：12名

施設名：生活介護支援事業所 のびやか

運営法人名：社会福祉法人さがみ愛育会

施設種別：障害者サービス事業所(生活介護)

住所：相模原市中央区横山4-12-14

URL: <http://nobiyaka.sukoyakahoikuen.jp>

アーティスト：西井夕紀子(作曲家)

アシスタント：松島俊哉、欠田芳憲、塩谷維摩

にしい・ゆきこ

1983年生まれ。作曲家。演劇やダンス、映画などへの楽曲提供を行う。主な参加作品に、東京国際芸術祭(現フェスティバル/トーキョー)参加演劇作品『アトミック・サバイバー - ワーニヤの子どもたち -』(演出：阿部初美、2007年)、ダンス『わたしたちは生きて、塵』(酒井幸菜、2012年)、ダンス『秘密も、うろ覚え。』(モモンガ・コンプレックス、2013年)、ドキュメンタリー映画『おとなのかぐく』(Studio Q-Li、2014年)、ドキュメンタリー映画『筑波海軍航空隊』(プロジェクト茨城、2015年)、野外ダンス公演『森の中のモモンガ・コンプレックス』(モモンガ・コンプレックス、2016年)、一部ホーンアレンジメントで参加したアルバムにcero『My Lost City』がある。東京芸術大学音楽学部音楽環境創造学科卒業、同大学音楽研究科音楽音響創造分野修了。<https://www.yukikonishii.com/>





音楽

ひふみ×岸野雄一 「身体を流れる音楽」

ひふみは、2011年に横浜市神奈川区六角橋にできた施設です。精神障害のある人が地域の中で安心して生活するための居場所づくりを目指しています。今回は、ディスコ全盛期に青春時代を過ごした利用者の方がいることをきっかけに、ディスコを行うことになりました。コンビニや盆踊りなど街の中でDJをしている岸野雄一さんと訪れ、11月と2月の2回開催しました。ディスコを懐かしいと思う人もいれば、初体験という人もいます。選曲から飾り付け、衣装まで、利用者と職員のみなさんで準備をすすめ、ふだん過ごしている施設がディスコ会場に様変わり。思いきり歌って踊って、非日常を味わいました。



1日目 非日常の時間を堪能する

会場に到着すると、かつらをかぶったり着ぐるみを着たり、みなさん思い思いの衣装を身にまとして開始を待っていました。この日は他の施設の人も遊びに来ており、会場は人でいっぱいです。窓のシャッターを閉め、部屋を暗くすると会場から歓声が上がりました。天井にはミラーボールが回っています。岸野雄一さんの挨拶のあと、DJブースから音楽が流れ始めます。飛び跳ねたり身体を揺らしたり、会場全体がうねりとなりました。途中、ボイスパーカッションが得意な人がパフォーマンスを始めました。アシスタントのアボカズヒロさんが、レコードをこするスクラッチで応じます。最後の曲では「ひふみ！」とコールが沸き起こり、興奮冷めやらぬまま終わりとなりました。

2日目 踊る楽しさを共有する

この日は施設の一角にバーコーナーが作られ、少し大人な雰囲気のホテルでした。みなさんの服装もドレスなど華やかです。岸野さんの「盛り上がっていきましょう」という掛け声でディスコの時間が始まりました。近くにいる人と視線を交わしたり、手を繋ぎながら音楽に身を委ねます。フォークダンスでおなじみの曲が流れると、あちこちに輪ができ、みなさん歌いながら踊っていました。今回は、スポットライトが当たるパフォーマンスコーナーが用意されており、そこで好きな歌を歌ったり、自作のポエムを披露する時間も設けられました。後半にはチークタイムが入り、ペアになって会話を楽しみながらゆったり踊ります。最後は全員が手を繋いで大きな輪になり、会場が一つになりました。

■アーティストからのコメント

場のテンションが上がり過ぎないように細心の注意を払いながらも、思いっきり踊って楽しめるように、と考えていた。ひふみでは、あらゆる参加者の多様な反応が受け入れられ、かつ開放感があり、とても居心地がよかった。参加して頂いた方の意見で最も嬉しかったのは、「ふだん、何事も考えすぎの自分が、なにも考えずに音楽に乗って、楽しんで踊れた。こんな自分もいるのだと新たな発見があり、とても新鮮だった」という声だった。あらゆる人にとっての居場所が、もっと増えるとよいと感じた。(岸野雄一)

■福祉施設からのコメント

今回ディスコをやることによって、改めて外部からの働きかけの威力の大きさを感じました。ディスコという非日常の世界を楽しむには、日常を営む場であるひふみの力だけではやはり生み出せないものだと思います。利用者のみなさんのイベントを盛り上げよう、楽しもうとするモチベーションをとってもいい形で引き出してくださったと思います。あと、ディスコという「みる／みられる」関係を問わないかたちで音楽に身をゆだねて踊れる体験は、ふだん踊ったりすることの少ない利用者のみなさんにとってはとても心地よい体験だったと思います。(中村麻美)

ひふみ×岸野雄一「身体を流れる音楽」

期間：2018年11月21日(水)、2019年2月16日(土)

時間：13:30～15:00

参加者：1日目：35名、2日目：36名

施設名：地域活動支援センター ひふみ

運営法人名：特定非営利活動法人あすなろ会

施設種別：地域活動支援センター

住所：横浜市神奈川区六角橋6-2-13

URL：https://ura-shima.com/sisetsu.html#hihumi_sisetsu

html#hihumi_sisetsu

アーティスト：岸野雄一(スタディスト)

アシスタント：アボカズヒロ、賃貸人格

さしの・ゆういち

1963年1月11日生まれ。東京藝術大学大学院にてサウンド・デザインの教鞭を執り、美学校の音楽コースではコーディネーターと講師を務めている。ミュージックマガジン等での音楽/映画評論の執筆や、NHK-FM「日本ロック事始め一部始終」の選曲・出演、NHK Eテレの道徳番組「時々迷々」のテーマソングの作詞・作曲・歌唱と番組全体の音楽プロデュース、その他様々な映画に俳優や音楽プロデュースとしても関わる。プロデュース・脚本を手掛け、自らが主演した音楽劇「正しい数の数え方」は2015年、第19回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門の大賞を受賞した。アーティストとして、ワッツタワーズやヒゲの未亡人、SPACE PONCHなどのバンド、ユニットで活躍する中、自身のレーベル「Out One Disc」では様々なジャンルの音楽をリリース。

また、アジア・ヨーロッパでのライブ・DJ・講演活動や、海外のアーティストを日本に招聘するなど、諸外国との交流も盛んに行っている。これらの多岐に渡る活動を包括する名称として、スタディスト(勉強家)を名乗り活動を行い、常に革新的な『場』を模索している。<http://www3.tky.3web.ne.jp/~gamakazz/kishino/>





美術

リバーサイド泉Ⅲのぞみ・ひまわり×ドゥイ 「五感を使って変化を楽しむ」

リバーサイド泉Ⅲのぞみ・ひまわりは、横浜市泉区にある生活介護施設です。成人が通う「のぞみ」と、児童の放課後デイ事業を行う「ひまわり」が同じ敷地内にあり、主に知的障害と身体障害を併せ持った方が1日25名ほど通われています。今年、造形ユニットのドゥイと訪れ、五感を働かせて素材に触れるような取り組みを行ないました。身体の動く範囲やコミュニケーションの方法など、身体の状況がさまざまな利用者のみなさん。「なんだろう」「触ってみたい」という気持ちから、自ら手を伸ばしたり、じっと視線を向ける様子が見られました。季節感を取り入れながら、全体で場の雰囲気を共有することができました。



1日目 氷と水の変化を感じる

「のぞみ」と「ひまわり」で時間を分けて行い、前半は「のぞみ」のみなさんが参加しました。みなさんが囲む机には、ネジや見慣れない形の金具が入ったバットが置かれています。続いて、手の平よりも大きな氷の塊が一人ずつに配られました。「氷の上にネジを置くとその形に溶けます」とドゥイのお二人がまずやって見せます。みなさんも金具を次々に乗せたり、氷を叩いて音を聴いたり。最後はできた穴に、絵の具や色のついたゼラチンを流し込み、混ざり合う色とゼラチンの感触を楽しんでいました。後半は「ひまわり」の活動部屋へ。まずは大きな水槽に、モールや洗濯ばさみなどの素材を入れ、水の中で落ちるの様子を楽しみます。続いて、魚の形の枠が配られ、枠の中に張り巡らされたセロハンテープに、カラーセロハンやストローなどを貼り付けます。最後に完成した魚を上から吊るし、暗くした部屋でプロジェクターの光を当てます。壁に色とりどりの魚が泳ぎ、水中のような空間になりました。

■アーティストからのコメント

8月から始まり3回目は2月と、全体の期間が長い全3回でした。そのため、密度が薄くなるような気がしていましたが、久しぶりに行って挨拶した時に、利用者みなさんに「覚えてるよ!」と言ってもらい嬉しかったです。期間が長かったおかげで、季節に合わせたワークショップが提案できたのは良かったと思います。(ドゥイ・小野亜斗子)

■福祉施設からのコメント

3回に渡るワークショップは、どれも新鮮でした。中でも印象的だったのは、ブロック氷の上に釘等に乗せたり、カラフルな絵具を垂らしたり、氷が融けていく様を楽しむ回でした。滅多に触れる事のない氷の冷たい感触に利用者みなさんも少し驚いた様子で、貴重な体験ができたと思います。また「ひまわり」での、水槽に様々なものを選び取って中に落としたり、製作したものに水槽を通して光を当て、水族館のように演出するという流れはとても自然で、新鮮かつ刺激的な時間となりました。私たちが持ち合わせていなかった視点で取り組まれたワークショップに、利用者みなさんはもちろん職員も大いに刺激を受けました。(中尾知子、伊藤恵美)

2日目 それぞれのツリーをつくる

この日は「のぞみ」と「ひまわり」合同で行うクリスマス会でした。利用者みなさんもスタッフも、サンタ帽など被り物をしていました。今日は前回「ひまわり」で行なった魚の形を、三角形に変えて、クリスマスツリーを作ります。カラーセロハンや折り紙、シールにモールなど、たくさんの素材の中から、それぞれ吟味して気に入ったものを手に取ります。手を細かく動かすことが難しい人も、カラーセロハンを握った手に、職員みなさんが枠を近づけて共同作業をしていました。最後は、部屋を暗くしてプロジェクターで投影したり、窓のそばに吊るして陽の光を当てて、カラフルな影ができるのをみんなで眺めました。

3日目 素材で遊んで、飾りをつくる

最終日となる今回は、紙というひとつの素材をじっくりと味わうことから始まりました。コピー用紙、花紙、チラシ、ロール紙など丸めたり、破ったりして、触感の違いを楽しみました。その後は、アルミホイルやモール、セロファン、風船なども追加され、さらに感触を確かめていきます。それぞれの素材を組み合わせて、仮面やメガネをつくり、着飾る人も。利用者みなさんと職員みなさんが一緒に手を動かしながら、自分のお気に入りの装飾品をつくっていきました。

リバーサイド泉IIIのぞみ・ひまわり×ドゥイ
「五感を使って変化を楽しむ」

期間：2018年8月28日(火)、12月26日(水)、
2019年2月4日(月)

時間：1日目13:30～15:30 2日目10:
30～11:30 3日目10:15～11:00

参加者：1日目24名、2日目23名、3日目:
10名

施設名：リバーサイド泉IIIのぞみ・ひまわり
運営法人名：社会福祉法人横浜市社会事業協会
施設種別：障害者サービス事業所(生活介護)
住所：横浜市泉区下飯田町811-6番地
URL:http://www.ysjk.jp/facilities/facilities_09.html

アーティスト：ドゥイ(造形ユニット)

ドゥイ

小野亜斗子・轟岳によるユニット。2006年より、横浜・石川町で出会った元クリーニング店の建物を自ら改装した「ドゥイ山」にて「ドゥイのこども造形教室」を開き、こども達との閃きのセッションを日々展開。「ドゥイのこども造形教室」以外にも、保育園や幼稚園、学童保育所の他、各種の催しにて、参加者それぞれの発想や閃きの面白さと、即興性を大切に考える「クリエイティブな遊びの時間」を通し、創作行為をより身近でより深いコミュニケーションの手段とすべく活動。<http://duilab.com>





リエゾン笠間×ドゥイ、勝見淳平「触る、で広がる世界」

リエゾン笠間は、横浜市栄区にある障害者支援施設です。主に身体障害のある人が50名ほど入所するほか、自宅などから通う人もいます。今回は造形ユニットのドゥイのお二人と、パン職人の勝見淳平さんと訪れました。「物を作るおもしろさを感じられたら」という希望から小麦粉、酵母、紙、風船など様々な素材と触れ合うことにしました。一人ひとりの中に、さまざまな世界が広がっているようでした。

1日目 変化を五感で感じる

電子音のような不思議な音が鳴り響くなか、ワークショップが始まりました。音の正体は、スピーカーのような機械に繋がれた白菜。「植物の声を聞く機械です」と轟さん。「これから何が起ころんだろう」と固唾を呑むみなさんのもとに、小麦粉、塩、酵母と、パンの材料となる素材が入ったボウルが順番に回ってきます。さらさらとした感触を味わったり、匂いをかいだり。そのうちに水が加わり、感触も匂いも変化していきます。初めはしかめっ面だったけれど、柔らかい生地を触ると笑顔になる人も。完成した生地は丸めたり握ったりして成形。思い思いの形が鉄板に並びます。一部は、その場でフライパンで焼き、甘い香りに包まれながら試食をしました。

2日目 素材で遊んで飾る

前回成形したパンは、勝見さんによる装飾が施され、すてきな飾りに。枕になりそうなほど大きなパンもあり、重みを腕に抱いて感じます。そのうちに、ドゥイのお二人がみなさんに近づき、色紙を破りました。続いてみなさんも職員の方と一緒に、色紙をちぎったり丸めたりします。アルミホイルや風船など、さまざまな素材に触っていると、部屋の中に張り巡らされたセロハンテープに素材が貼り付けられ、目の前の風景がどんどん変わっていきます。次に、それぞれにプラスチックでできた三角形の型枠が配られ、枠内に貼られているセロハンテープにカラーセロハンを付けていくと、クリスマスツリーのような雰囲気。他の素材と一緒に吊り下げて、最後に暗くした部屋の中でプロジェクターの光を反射させたミラーボールで照らしました。

■アーティストからのコメント

今回は鎌倉のパン屋さん paradise alley の勝見淳平さんにお力添えをして頂き、1回目はパンを通して、2回目は色々な造形材料を使って部屋に飾りを作るようなことをし、全体的に「触る」というテーマの中で行いました。小麦粉や塩、酵母を直接触り、そこに水を足して捏ねることで感触が変わっていく、その過程で個別には密な時間を過ごせたように思います。触ること、それによって伝わるといったことについていろいろ考えさせられる体験でした。(ドゥイ・小野亜斗子)

■福祉施設からのコメント

今回の参加者は、半分以上がご自身からの意思疎通や、言葉での説明などが困難な状況がありました。しかしパン生地を成型していると様々な反応が返ってきました。最初は小麦粉に触れて嫌がる様子でも、柔らかい生地になると徐々に表情が柔和になる方。ふだん表情の変化が少ないけれど、生地の成型する際に食べたような表情で口を開く方。熟睡していても、生地に触れると目を見開きパンを作っていることを認識していた方。最後は光と音の不思議な空間を楽しみ、変化が少ない環境にいる事が多い利用者さんが、ひと時ですが、別世界の様な楽しい環境を楽しめたと思っています。(今村憲一)



期間：2018年12月7日(金)、12月12日(水)

時間：13:00～15:00

参加者：1日目：16名、2日目：16名

施設名：リエゾン笠間 運営法人名：社会福祉法人同愛会

施設種別：障害者支援施設 住所：神奈川県横浜市栄区笠間3-10-1

URL:<http://liaison-kasama.com/>

アーティスト：ドゥイ(造形ユニット)、

勝見淳平(PARADISE ALLEY BREAD & CO)

ドゥイのプロフィールはR09を参照

かつみ・じゅんべい

1974年、神奈川県鎌倉市出身。99年に辻堂海岸の海の家SPUTNIKの立ち上げから参画。2005年にロンドンバスでの日本全国縦断ツアーを実施。同年、ツアー終了後に勝見淳平と愉快的な仲間達による培養発酵研究所、PARADISE ALLEY BREAD & CO.をオープン。鎌倉中央食品市場内に構える休憩所と、逗子のB&B(Brewery&Bakery)という2つのお店(装置)より、パンという宇宙を通して発酵時空間を発信。自ら酵母を培養/発酵させて生み出す遊び心溢れるパンは、味も見た目も唯一無二。

<http://cafecactus5139.com/paradisalley/>

ダンス



コミュニティセンター・フレンズ、わたぼうし作業所×上村なおか「身体に出会い、解きほぐす」

コミュニティセンター・フレンズとわたぼうし作業所は、横須賀市にある障害者地域作業所です。主に身体障害と知的障害を併せ持った方が通い、紙製品や布製品などを作る作業に取り組んでいます。2つの施設はふだんから合同でレクリエーションやイベントを行っています。今回は、みなさんの身体にアプローチする取り組みをしてみたいということで、ダンサーの上村なおかさんと2日間伺いました。

1日目 気持ちいい身体を見つける

床に敷かれたマットを囲んで円になり、ワークショップが始まりました。ほとんどの方が車椅子を使用しています。まずは、上村さんたちが、一人ひとりと会話をしたり、指や手に触れたりしながら挨拶します。続いて「気持ちいいように動いてみましょう」と、上村さんたちがマットの上で身体を動かしました。つられてみなさんも、次々とマットに寝転びました。後半はウクレレなどの楽器の音に合わせて身体を動かします。最後に賑やかなテンポのジブシー音楽が流れてきました。上村さんが飛び跳ねるように踊ると、みなさんその動きに合わせて楽器を鳴らしたり、見入ったりしていました。

2日目 身体を通して空間を感じる

今回は車椅子を使用している人は半数以下で、視覚障害のある人も参加していました。1日目同様、上村さんたちが順番に挨拶するところから始まります。次に「この部屋を探索してみましょう」と、会場の中を自由に歩きます。そのうち上村さんが太鼓を鳴らし「音のする方にそっと動きます」と呼び掛けるとみなさん一斉に動き始めました。アシスタントのみなさんも楽器を持ち、あちこちで順番に鳴らします。足踏みや、手拍子など、自然とみなさんから音が出てきました。そのまま、床に敷かれたマットに移動します。車椅子に乗っていた方は、思っきり腕を伸ばしていました。最後は1日目と同じ音楽が流れ、お祭りのような雰囲気でも終わりととなりました。

■アーティストからのコメント

最も印象的だったのは、「ひとりひとり」と「みんな」の、両方が際立っていたことでした。参加者のみなさんはそれぞれの<カラダの事情>があるのですが、ともにカラダの時間を過ごすことでその方が見ているそれぞれの世界を感じられる瞬間がありました。そして同時に、ワークショップリーダーとも言える私たちと参加者の方と施設の職員さん、みんながそれぞれどこにいるのかよくわからなくなるほど、なんというか溶けた瞬間があったことが驚きでした。(上村なおか)

■福祉施設からのコメント

車椅子状態での活動が当たり前で、床やマットなどで身体を動かす場面は初めてでした。いつも身体中を緊張させ、横になったときも身体を丸め力を入れていた人が、身体に伝わる小さな振動が揺らぎとなって全身に伝わり、力が抜け開放されていきました。どこにも力が入っていない姿を初めて見てびっくりしました。身体へのアプローチで心も自由になったようです。同様のことが他の人にも見られました。身体で感じ、身体で表現するということが初めてのことだったと思います。心の深いところに響いたんだなと思いました。(渡邊由真子、松崎由美子)

期間：2019年2月14日(木)、2月15日(金)

時間：10:30～11:45

参加者：1日目：11名、2日目：7名

アーティスト：上村なおか(ダンサー・振付家)

アシスタント：楠美奈生、尾形直子、宮崎あかね

施設名：(1)コミュニティセンター・フレンズ、(2)わたぼうし作業所

運営法人名：(1)コミュニティセンター・フレンズ、(2)わたぼうし作業所

施設種別：(1)(2)障害者地域作業所

住所：(1)横須賀市池上2-10-18、(2)横須賀市坂本町2-32

うえむら・なおか

石川県金沢市生まれ。5才よりバレエを始める。'91年お茶の水女子大学舞踊教育学科卒業。木佐貫邦子にダンスを、笠井観にダンスとオイリュトミーを師事し、作品にも多数出演。「ひとつの身体」の可能性を探るべく'95年より自作ソロダンスを開始。国内外で発表。'16年より、言葉とカラダの結びつきを探索するシリーズ「Life」始動。「身体の見えと冒険」をキーワードに様々なジャンルのアーティストとの協働作業やワークショップ、振付、共作、客演も積極的に行う。04年度、第36回舞踊批評家協会新人賞受賞。05年より桜美林大学芸術文化学群で講師を務める。

www.naoka.jp





ダンス

みどり福祉ホーム×砂連尾理 「身体と身体で出会う」

1986年の完成当時から、横浜北部の重度重複障害者の日常を支えているみどり福祉ホーム。今年度はダンサー・振付家の砂連尾理さんと訪れ、3日に渡ってワークショップを行いました。午前と午後で2グループに分かれ、10名程度ずつ参加しました。目の前に見知らぬ存在を感じることから始まり、利用者みなさんのその場、その瞬間の身体を、見つけていきました。いつも利用者みなさんのそばで日々を過ごしている職員さんも一緒になって、身体を通して自分や他者に出会い直す時間となりました。



1日目 お互いの身体を探る

午前／まず砂連尾さんたちが、一人ひとりと握手をすることから始まります。アシスタントの白井さんはサックスで、みなさんの動きに音を加えます。差し出された手をさっとつかむ人、横に座られて戸惑う人さまざまです。一対一だったダンスが、最後には混ざり合ってひとつのうねりとなりました。

午後／午後はどうとうとする人もいて、まったくモード。まず一人ひとりの名前を聞いた後、午前同様、砂連尾さんたちが一人ひとりと握手をします。マットで仰向けに横たわっている方を挟むように、砂連尾さんと職員さんの方が両脇に寝転がると、「寝てる場合ではない」と言わんとばかりにごろんとうつ伏せに。いつもと違う雰囲気、身も心を揺さぶられた様子でした。

2日目 他人の身体に気付く

午前／「今日は『自由を叫ぶダンス』です」と砂連尾さん。順番に今の気分を叫び、叫んだ声を白井さんがサックスで奏でます。続いて赤い毛糸を取り出した砂連尾さん。それぞれの体に巻き付けて全員が毛糸でつながれていきます。他の人が動くと、毛糸を通じてその動きが感じられ、意図的に毛糸を揺らして楽しんでいる人もいました。

■アーティストからのコメント

みどり福祉ホームのみなさんとは、毎回、お互いの距離感を探り合いながら慎重にそして敬意を持って接近していきながらも、お互いの距離が縮まってきたら思い切って越境していききました。そしてお互い越境することに慣れてきたら時に不快という回路も怖がらず通ってみると、それまでとは異なったレイヤーが立ち現れ、そんな世界の発見にそれぞれの身体は戸惑いながらもどこか心踊っていました。そんな事を毎回繰り返しながら、最後のセッションではいつの間にかお互いが自律し合いながら響きあう、そんな関係が広がっていたように感じます。(砂連尾理)

■福祉施設からのコメント

以前にもダンスのワークショップを経験しているので、利用者の受け入れは良かった。ダンサーが各利用者に時間をかけて関わり、利用者がその場の流れに身を任せ、楽しんだり不思議な顔をしたり、楽器に対して不快な表情を見せたりして、ふだんの活動ではみられない利用者の姿があった。一方で施設職員としては、ダンサーが事前に行うことの目的や意図していること、若しくは、当日にその場で行おうとしている事を伝えてもらう事で、もっと施設職員として利用者主体のダンスができたのではないかと感じた。(鈴木聡子)

午後／前回に続き、ゆったりした空気が流れる午後。だらんとよだれを垂らしながらまどろむ一人の男性を見て、「彼を先生に、みなさんも力を抜いて」と砂連尾さん。よだれが垂れるくらい身体をゆるませて、そのまま『まどろみのダンス』。最後は午前と同じく、みなさん赤い毛糸でひとつになり、じっとそれぞれの身体を感じていました。

3日目 言葉の中の身体

午前／最終日は、事前に職員のみなさんに考えていただいた、詩に合わせて身体を動かします。利用者のみなさんの好きなことについてなど、ふだん向けるまなざしが感じられる言葉が並びます。自分から他人の身体に触れてみたり、白井さんが吹くサックスを叩いてみたり、親密な距離感の中でダンスが生まれていました。

午後／午後、詩に合わせたダンスから始まります。利用者のみなさんも発表してくださいました。3日間を通して見学に来ていた大学生が考えてきた「ダンスをします」と始まる詩が繰り返される中、じっと座っている人もいれば、砂連尾さんと追いかけてこをするように部屋中を動き回る人も。あちこちでいろんな身体が交錯していました。

みどり福祉ホーム×砂連尾理

「身体と身体で出会う」

期間：2018年11月26日(月)、12月3日(月)、12月10日(月)

時間：10:30～11:30 / 13:15～14:15

参加者：1日目：18名、2日目：18名、3日目：17名

施設名：みどり福祉ホーム

運営法人名：NPO法人みどり福祉ホーム

施設種別：障害者地域活動ホーム

住所：横浜市緑区十日市場町 808-3

URL:<http://midori-fukusi.wixsite.com/midorifukusi>

アーティスト：砂連尾理(ダンサー・振付家)

アシスタント：木村玲奈、白井愛咲

じゃれお・おさむ

91年、寺田みさこダンスユニットを結成。1993年～1994年、ニューヨークにダンス留学。ホセ・リモンテクニックを Alan Danielson に師事。02年、「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」(グランプリ)、「オーディエンス賞」をW受賞。受賞作「あしたはきっと晴れるでしょ」はジャカルタ、パリ、ブラハ、ソウル、ニューヨーク、メルボルンで上演。その他の作品をあわせて「砂連尾理+寺田みさこ」としては、海外9ヶ国10都市で公演を行う。04年、京都市芸術文化特別奨励者。08年度文化庁・在外研修員として、ドイツ・ベルリンに1年滞在。その間、様々なダンスプロジェクトに参加する。2006年、合気道の稽古を始める。これまでに中尾真吾(七段)、永田正昭(六段)、Hans retschmer(五段)に師事。近年はソロ活動を中心に、ドイツの障がい者劇団ティクパとの「Thikwa+Junkan Project」(2009～2012)、京都・舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」(2010)、「とつとつダンス part.2—愛のレッスン」(2014)、宮城・関上(ゆりあげ)の避難所生活者への取材が契機となった「猿とモルターレ」(2013～2017)、音楽家・野村誠との「家から生まれたダンス」(2014)、濱口竜介監督映画「不気味なものに肌に触れる」(2013)への振付・出演等。立教大学 現代心理学部・映像身体学科 特任教授。https://www.osamujareo.com/





ダンス

YSK 作業所 × 岡田智代 「それぞれの表現を見つける」

YSK 作業所は、横浜市神奈川区にある地域活動支援センターです。主に知的障害のある女性 15 名程度が、エプロンやふきんを縫うなどの作業を日々されています。今年度はダンサーの岡田智代さんと 5 日間に渡って伺い、ふだん座っている時間が長いみなさんの身体をほぐすような取組みをしました。身体だけではなく言葉も使って、ゲーム感覚で楽しめるプログラムに、みなさんの身体だけではなく気持ちもほぐれていくのを感じました。岡田さんが寄り添って、その人の表現が出てくるのを待ったり、手伝ったりすることで、思いもよらない言葉や動きがそれぞれから引き出されました。



1日目 身体で表現する

まずは、岡田さんが持つ太鼓を、利用者のみなさんが順番に、高いところで、頭で、と変化を加えながら叩き、身体を慣らしませ。続いて、それぞれの自己紹介ダンスを作りました。呼んでほしい名前と一緒にポーズをとり、野菜の皮がむける様子を身体で表わす動きと組み合わせます。表現に悩む人は、岡田さんと一緒に考えていました。後半は全身のストレッチをじっくり行います。最後に二人組になって、鏡のように相手に合わせて身体を動かすワークを行いました。

2日目 身体を使って遊ぶ

この日はゲームを取り入れた内容から始めました。ポーズを取りながらじゃんけんをし負けた人は勝った人の後ろにつく「じゃんけん列車」や、トンネルを作ってくぐったりしました。前回考えた自己紹介ダンスを順番に行った後は、歌に合わせて身体を動かしました。歌詞や曲調によって、動きも変わります。最後に、ティッシュを息や手を使って相手に渡す「ティッシュリレー」をしました。ティッシュの行方に、その都度声や拍手がわき上がりました。

3日目 みんなで動きを楽しむ

お馴染みの自己紹介ダンスの後、「だるまさんがころんだ」を応用したワークをしました。「ころんだ」の代わりに他の言葉を入れてその動作をします。「ふわふわ」といった動きに、思わず笑みがこぼれます。ストレッチの後、今度はクリスマスの音楽に合わせて、岡田さ

んの振りをお手本にみんなで踊ります。最後に、一人ひとりの好きな歌のメドレーが流れてきました。自分の好きな曲がかかると率先して踊る方もいて、大盛り上がりでした。

4日目 言葉と一緒に身体を動かす

今回は「しりとりにダンス」をしました。考えた言葉を身体で表現し、誰かにタッチします。次の人は、しりとりのように言葉をつないで動きます。なかなか思いつかない人は、自分が納得のいく言葉が見つかるまで岡田さんと一緒に考えていました。最初は単語で、続いて文章で。個性的な言葉や文章が次々と飛び出しました。後半はそれぞれの好きな歌に合わせて自由に身体を動かす、最後はクリスマスの音楽に合わせてみんなで踊りました。

5日目 自分の言葉を見つけて動く

「今日はダンスかるたをします」と岡田さん。ひらがなが書かれたカードを、床に置きます。読まれた文字から文章を考え、身体で表現しながらカードを取ります。何も思いつかなくても、まずは前に出てきてから考える人もいて、みなさん積極的です。最後に岡田さんから「プレゼントがあります」と。流れてきた歌に合わせて、一人ひとりの前でその人の自己紹介ダンスを踊り、みなさんで踊ったクリスマスの振付で締めくくりました。

■アーティストからのコメント

同じメンバーで毎日過ごす場に外から入っていくと少しだけ空気が変わる。ゲーム感覚で身体を動かすことで普段より積極的になり、言葉と動きを考えることで非日常的な心身になっていったように思う。本人に任せ手を放していくこと、何かが現れるまで待つことの難しさについて私もスタッフも意識する場となった。参加者は回を重ねるごとに私たちが考えるよりも遥かに自由にハードルを越えていく。常に「誰のための何なのか」を忘れずにいたい。(岡田智代)

■福祉施設からのコメント

今回2年目の実施となりますが、回を追うごとに参加者のリラックス度が増しており、先生との信頼関係が深まったと感じます。日頃消極的であったり体を動かすことが苦手な方たちが、日に日に積極的になれたのも信頼関係あってこそのことと思います。自分で考え、行動する(しかも楽しんで)チャンスを得られたことは、参加者の今後にとって、とても大きな第一歩になると感じました。(和田香苗)

YSK 作業所×岡田智代
「それぞれの表現を見つける」

期間: 2018年10月2日(火)、10月30日(火)、
11月20日(火)、12月18日(火)、2019年1
月15日(火)

時間: 10:00 ~ 11:30

参加者: 1日目: 10名、2日目: 8名、3日目:
10名、4日目: 11名、5日目: 10名

施設名: YSK 作業所

運営法人名: NPO 法人たんまち福祉活動ホーム

施設種別: 地域活動支援センター

住所: 横浜市神奈川区反町1-7-3 アースビル2F

アーティスト: 岡田智代(ダンサー・振付家)

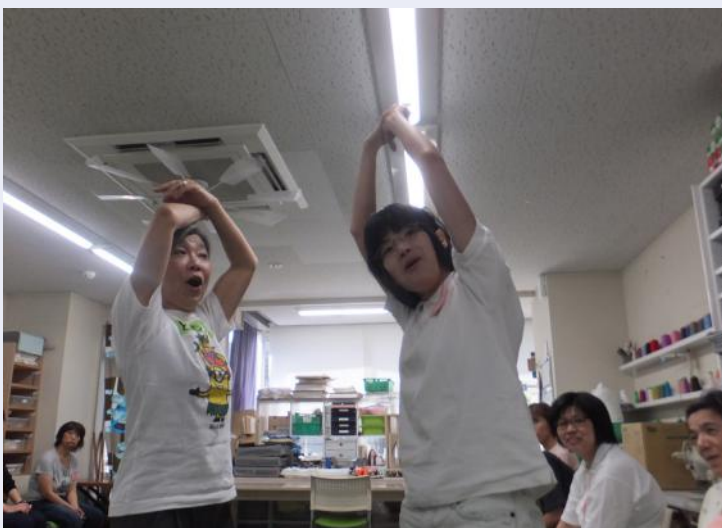
アシスタント: 佐々木すーじん

おかだ・ともよ

1956年生まれ。幼少より踊る。大学卒業後ダンスを取り巻くダンス以外のあれこれから逃れるようにダンスから離れ、日本航空国際線客室乗務員として勤務。結婚後三児の母となって後、再び踊り始める。

2005年トヨタコレオグラフィーアワードのファイナリスト。ソロ活動の他、多田淳之介、振子びじん、野上綱代、FAIFAI、山下残等の作品に出演。ジェローム・ベル「ザ・ショー・マスト・ゴー・オン」日本上演に出演。「おやつテーブル」のメンバーとして2007年~2014年の公演に出演。近年は演劇公演にも幅を拡げる。中高年対象のストレッチクラスや親子ダンスワークショップ、特別支援学校や個別支援級などでもワークショップを行う。

ヨガ・インストラクター、アムリタ智代。洗足学園大学非常勤講師。静謐な時間と炸裂するエネルギーを併せ持つ。日常的な身体に目を向け、ただ生きるように踊る。<http://odorum.net/>



実施を振り返って

～ダンスプログラム検討会～



ゲスト：上村なおか、砂連尾理、岡田智代、入手杏奈（以上ダンサー・振付家）

聞き手：小川智紀、田中真実、川村美紗（STスポット横浜）

日時：2018年12月4日（火） 16:40～18:10 場所：立教大学新座キャンパス 参加者：10名

（ゲストプロフィールについては上村なおか P.11、砂連尾理 P.13、岡田智代 P.15、入手杏奈 P.26 を参照）

今年度は、いくつかの障害福祉サービス事業所でダンスの取組みを行いました。講師のひとりである砂連尾理さんが受け持つ、立教大学現代心理学部・映像身体学科のゼミの時間をお借りして、現場で起きていることを共有し、今後のプログラムの改善につなげるための時間をもちました。当日は、学生だけでなく、卒業生や他分野のアーティストも集まり、障害のある人との文化芸術活動について、議論を深めることができました。

◆できないことはない

—最初は入手杏奈さんの現場についてご紹介したいと思います。横浜市の施設で磯子区障害者地域活動ホームという場所にお伺いしました。入手さんは障害者施設に伺うのは初めてでしたか？

入手：そうですね。自分にできるのだろうかと不安だったので、最初はお引き受けするかすごく悩んだんですけど。自分にとっても挑戦になりました。

—自分がボールになって誰かのところに行くというワークでは、最初はボールを動かしてから、今度は自分の身体で動くという流れでした。これはどういうことが起きたらいいかと考えていましたか？

入手：最初はただのキャッチボールで、名前を呼びながら相手が取れるようにボールを投げていくんですね。そのあと自分とボールが一緒になって移動して、そのあとボールを無くして、どんな動きでもいいから動かして人のところに行ってみようという。ルールとしてはそれくらいです。ある人が車椅子から降りてでんぐり返しをしたいと言いました。じゃあやってみようって言って5人くらいの大人で支えて、その人がでんぐり返しをを始めました。そのとき、そういうことが起こると想像していなかったで、場の空気も底が抜けちゃったというか。わたしもすごいびっくりしたし、その人自身も身体の向こう側に飛び込んだような感覚があったのではと思います。皆さんとワークをして何が起るのかを、自分の中で先に予想してはいけないと改めて感じ、ドキドキした瞬間でした。

—でんぐり返しの場面は、職員の方も止めなかったというのがすごかったなと。入手さんがぐるぐる回ったりしているのに触発されたんじゃないか、ということ振り返りのときに話しました。3日間を通して、参

加者との関係の変化はありましたか？

入手：よそ者がそこに入って行くので、最初はやっぱり警戒もするしすぐに仲良くなるのは難しいですね。その人との距離ってそれぞれ違うと思うので。それをずらしていく作業が3日の中でできたかなと思っています。

—ずらしていくってというのは？

入手：関係を。関係の取り方って決まっていなくて。ずらすとしか言えないんですけど、距離を見ながら、近づいたり離れたったり。こうすれば仲良くなるというのがないので、探る感じ、という気がします。

岡田：何か困ったことってありますか？ 相手の反応でも、どんなことでも。

入手：うまく伝わらないんじゃないかとか、みんながどれくらい理解してくれるんだろうかという不安と心配を抱えていったところから始まりました。でも、できないことがないんだなと思って。できなかつたり、別のことが出てきちゃってもそれはその人の中で変換されていて。決めつけられないことが大事だなと。

◆その人のやり方にスポットを当てる

—一次は岡田智代さんと伺った YSK 作業所です。冒頭にいつも自己紹介ダンスというのをやっていました。

岡田：呼んでほしい名前を聞いて手振りをつけてもらうということと、好きな果物か野菜を思い描いてその皮をむく感じを、自分で選んで動き

を考えてもらいます。さっき入手さんも言っていたけど、「できる」ってことがどうのことかっていう、自分のものさしみたいなものを一旦脇に置いてやりました。身体を動かすということも、他のワークでは動かせどストレッチになると手が少ししか上がらないということがあるんですが、上がらないんじゃないくて、その人のやり方なんだらうなという気がしています。ここで伸びなくても違うワークで生き生きと動いていたら、それでいいのだと思います。できないことではなくて、「その人のやり方でやる」ということにこの時間だけでもスポットを当てたい、そんな思いがしています。その時間を本当に楽しんでもらえて、そして楽しみながら身体を動かしているというのが見えたらいいなと思ってやっています。

一楽しくすることで身体がほぐれていくという様子が、毎回見ええました。

入手：ワークショップをする中で、印象的だった言葉とか様子ってありますか？

岡田：ストレッチであまり身体が伸びない人が、トンネルを2人で作って早く通らないとトンネルが落ちるみたいにしたときに、すごい勢いでシュッと通って行って。この人は本当は身体能力すごくあると思って。それを見てから、必ずしも手を伸ばさないといけないとか、しなきゃいけないということにそんなにこだわらなくても、とっさの時に何か競争ごとになると威力を発揮するみたいなの、そういう部分がある時間に出ればいいなあって思うようになりました。

◆その人の身体を見つける

一今度は上村なおかさんと砂連尾さんが行かれているみどり福祉ホームです。上村さんには2年前に行っていたきました。ほとんどの方が車椅子を利用している施設です。福祉施設の中にはケアの専門家はいるとしても、身体の専門家はなかなかいない。上村さんとは、どういう現場を作っていくかを相談しながら進めていきました。当時の印象を教えてください。

上村：所長さんがすごく開けている方で、「楽しもう！」という雰囲気を最初の打ち合わせのときに感じました。いい感じに私たちのことも放し飼ってくれる施設で。もちろん介助の方とか、日々の安全を見てくださる方がいらっしゃる中ではなんですけど、そのほかの面では好き勝手にしていたと思います。どういうことが起きてても楽しめる方向にできたという作戦で、ダンサーだけ、整体師とかロルファーとか、楽器もできる人たちをアシスタントに選びました。場所も、隣でふだんの生活をしているところが隣接していて、休み時間にこっちでギターとか鳴らしていたら、引き戸がガラガラって開いてみんなに見つかったりとか。勝手に楽しく侵食していくみたいな感じで入っていったような気がします。

砂連尾：僕も同じ場所で実施をしています。基本的に言葉を理解しあってコミュニケーションするのは難しいですね。そういうときに関係を結んでいくのに、上村さんはどんな風に入っていましたか。

上村：あまり、ふだんのコミュニケーションの仕方というのは考えてなくて。初回のときに、1人ずつにわたしが挨拶に行くところから始めたんですね。最初はやっぱりみなさん「なんだろう？」という感じでした。そこで言葉じゃなくて気配みたいなののでその日の挨拶をしました。動きだけじゃなくて、音の力を借りたりとか。あとは実際に触れてみる。触れてみたことで、触れるとあるということがわかりますよね。実際の皮膚、もしかしたら皮膚じゃない何かでも触れるというような触れ方を試みて、コミュニケーションしたかも、と気づく。あとはその人の身体を見つけるところに、わくわくしました。

砂連尾：“その人の身体を見つける”って、多分これはダンサー言語だと思いますが、そこらへんのセンスに、ダンスの種もあるしコミュニケーションの始まりもあるのかなって思います。

◆距離感の越境

一続けて砂連尾さんとの取組みの様子も見てみましょう。これは初日に顔合わせをして、そのまま即興的なダンスになだれこんでいる場面です。砂連尾さんが踊ってなくても障害のある方と職員さんのセッションが起きているように見えます。

砂連尾：僕の場合は、言葉でのコミュニケーションはほとんどしませんし、毎回違うことをやります。毎回違うことをやって、利用者さんと目を合わせることもほとんどないですね。それは、さっきの気配ということと近いと思います。どういうふう全体で空気を作ろうかなと考えたときに、関係を揺るがし合うような、ある種越境しなきゃいけないことをします。それは距離を近づけていくという仕方もあるけど、意外と嫌なことをやるんですよ。「嫌です」の先をどう探っていくか。それだけ日常や倫理、道徳に縛られている価値観に身体は強固に縛り付けられているので、日常の中でフィクショナルな身体にするための手がかりとしては、距離感の越境だと。あるいは快不快みたいな。不快っていうのはすごく重要視しています。

入手：場をつくるということをされるときに、例えばさっきの映像なんかでは作りましょうという雰囲気をそんなんに出していないように感じました。どんなふうにしてその場を作っているんですか？

砂連尾：全体で一体になるっていうふうには考えないです。それぞれが個性を持った人たちなので、一人一人がいたいように参加してくれたらと考えています。大事なのは、その場や参加者に自分の身体をチューニングしてこうとする姿勢と、そしてそのチューニングが合うまで焦らずに待つことですね。また、それと同時に他者の世界に思い切ってダイブする気持ちも大事で、そんな感覚を常に探ろうとすることが結果としてダンスになっているのかもしれない。そのダンスが独りよがりにならないために、呼吸には意識的になるようにしています。自分が気持ちよく呼吸が出来ていけば、その呼吸を介してみんなとも気持ちよく一緒にいれる＝ダンス出来ていると思うので、呼吸のやりとりはとても大事です。

◆非日常の訪問者として

岡田：日常と非日常というのはすごくあると思うんですよ。職員さんとかメンバーはみんな日常だけど、わたしは非日常の訪問者として入っているという感覚がある。非日常がチャンスじゃないかなという気がすごくしますね。

砂連尾：福祉現場における非日常、つまりそこでの価値基準を逆転させるってことをどのようにして作っていくかは我々のようなダンサーに限らず、その場のルールに縛られないよそ者の介入が結構重要なと思います。

岡田：利用者のみなさんだけでなく、その場にいる人たちがこういうこともできるんだっていうことにシフトしていくチャンスでもある。もうちょっとゆるみのような、「それでもいいんだ」ということを、職員のみなさんも含めて思ってくれたらいいですね。

神奈川県内 福祉施設の取り組み紹介

ここでは私たちが施設に伺う中で触れた、障害のある人たちが生み出す表現や、日々を支えている職員のみなさんの想いについて、紹介します。みなさんも近くにきた際には、ぜひ遊びに行ってみてください。



やりたいことを形にする

白を基調とした明るい室内に、色とりどりの絵が映えます。利用者さんは机に向かって、思い思いに絵を描いていました。「その人のやりたいことに気づき、繋げることが福祉の役割」と理事長の萩原美由紀さんは話します。アートを通して、利用者さんが自己選択するという経験や、人に喜んでもらうという経験が積み重なっているそうです。ふと壁を見るとカラフルな災害用ヘルメットが。思わず頬が緩みました。

[施設情報]
施設名：アール・ド・ヴィーヴル
運営法人：NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル
施設種別：就労継続支援 B 型
所在地：小田原市久野 906 アネシスヒルズ 102
URL:<http://artdevivre-odawara.jp/>



まちの中で活動する

お伺いした時には、ちょうど節分の真っ最中ということで、鬼に向かって豆がまかれていました。鬼の仮面も手作りです。ここでは、美味しいコーヒーをいただきながら、絵をみたりグッズを買ったりできます。まちなかで展開することは、障害のある人の活動の顕在化につながります。施設長の北澤桃子さんと利用者のみなさんの掛け合いから信頼しあっている様子が伝わってきました。

[施設情報]
施設名：GALLERY COOCA & CAFE
運営法人：株式会社愉快
施設種別：障害福祉サービス事業所（生活介護）
所在地：平塚市明石町 14-8
URL:<https://www.studiococca.com/gallery-cocca>



みんながパフォーマー

「楽しいことを共有したい」という想いから、バンド活動やライブペインティングなど、精力的に全国を飛び回って活動を続けています。この日は、施設で行うイベントに向けて、ダンスや歌のリハーサルをしていました。構成など、利用者のみなさんがイメージをスタッフに伝え、相談しています。「職員もパフォーマー」とスタッフの酒井真弓さん。一緒にイベントを作り上げている雰囲気を感じました。

[施設情報]
施設名：Jump
運営法人：NPO 法人ハイテンション
施設種別：障害福祉サービス事業所（生活介護）
所在地：厚木市旭町 2-9-15 メゾンサモワール 1F
URL:<http://hitension.org/>



表現する喜びを見つめる

古民家風の一軒家の玄関を上がると、すぐ横の部屋には壁に向かって机が並び、利用者のみなさんがそれぞれの絵に向かっていました。施設長の矢田順二さんを始め、美術家を中心としたスタッフが技術的なサポートをします。「描く行為そのものが喜びである姿を見ると、幸福について考える」と矢田さん。利用者のみなさんの姿を通して、社会全体を見つめ直す機会になると話しました。

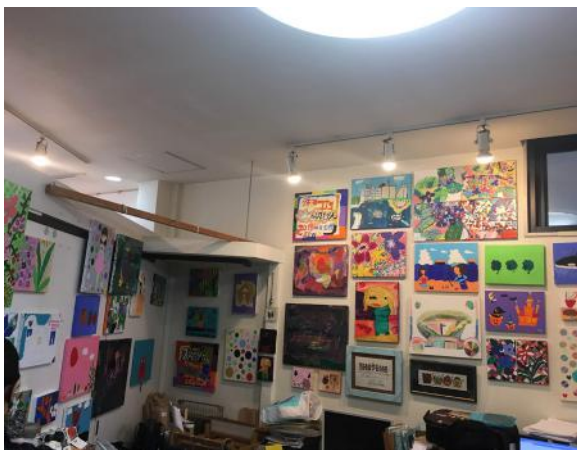
[施設情報]
施設名：アトリエそらのいろ
運営法人：特定非営利活動法人アートスタジオかまくらの森
施設種別：就労継続支援 B 型
所在地：鎌倉市由比ガ浜 1-2-6
URL:www.ateliersoranoiro.com



気持ちに向き合い、支える

陶芸や、絵画などの創作を活動の中心にしています。一人ひとり好きな場所に座って、それぞれの作業に取り組んでいました。利用者みなさんの創作活動を支えるスタッフの日比野優子さんは「みなさんの力を引き出すためには、必要な支援がそれぞれ違う」と話します。気持ちを整えるために話を聞く、資料となる本を用意するなど、日々向き合っています。

[施設情報] 施設名:studio トネリコ
運営法人:社会福祉法人 翔の会
施設種別:障害福祉サービス事業所(生活介護)
所在地:高座郡寒川町岡田 3-18-5
URL:<http://www.syonokai.jp>



地域の文化を耕す

街の中でギャラリーを併設した施設を開いているアートかれん。かれんの利用者や地域の人の作品が年間を通してギャラリーを彩ります。「福祉施設は地域のニーズを吸い上げる場となりうる。アートを始め、福祉だけではないつながりがあるとさらに活動が広がる」と施設長の南芳枝さんは話します。福祉施設が街の文化を耕していることが感じられました。

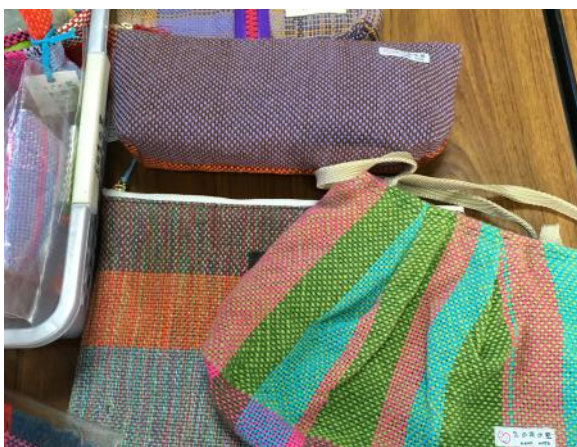
[施設情報]
施設名:アートかれん
運営法人:社会福祉法人かれん
施設種別:障害福祉サービス事業所(生活介護)
所在地:横浜市港北区大倉山 1-11-4
URL:<http://karen@muse.ocn.ne.jp>



生活と人生

開所時から音楽療法を取り入れ、月一回音楽の時間があります。「理解の仕方が様々だったとしてもそれもよし、それでいい、歌の時間はみんなでいっしょの時間を過ごせる時間」と施設長の大岡めぐみさんは話します。「食事や、入浴といった『生活』だけではなく、例えば歌をうたったりテレビを見たりすることもあって『人生』が豊かになる。どちらも大事」

[施設情報]
施設名:ぶどうの木
運営法人:特定非営利活動法人一麦
施設種別:障害福祉サービス事業所(生活介護)
所在地:横須賀市池上 5-3-2
URL:—



それぞれの色を織る

えのきの里では、さをり織りによる製品をつくっています。織られた反物の特徴を生かした製品で、同じ形のはひとつもありません。タグも利用者みなさんのイラストが採用されています。所長の山口新さんはじめ、利用者みなさんのアットホームな雰囲気の中で、のびのびと活動されていました。

[施設情報]
施設名:えのきの里
運営法人:特定非営利活動法人 座間市手をつなぐ育成会
施設種別:地域活動支援センター
所在地:座間市相模が丘 4-16-28
URL:—



生活に寄り添う

アガベセンターには、作業所や生活介護事業所、入所施設など個々の状況に対応できる場が用意されています。お昼時、カレーキッチンサラは、地域の人たちや同じ敷地内にある作業所で働いている人たちで賑わっていました。相談支援専門員の野村壘さんに案内していただきました。書き溜めたたくさんの絵を見せてくれる人もいました。その人に寄り添った生活を一緒に考える、そんな様子がうかがえました。

〔施設情報〕
施設名：アガベセンター
運営法人：社会福祉法人日本キリスト教奉仕団
施設種別：障害者総合福祉施設
所在地：座間市小松原 2-10-14
URL:<http://www.agape-jcws.com/>



身体を使って表現する

20代から60代までの主に知的障害のある成人の人が通う施設で、9月～10月にかけて3回に渡ってダンスワークショップを行いました。ダンサーの入手杏奈さんと、アシスタントの香取直登さん、涌田悠さんと伺いました。お互いの身体が触れ合うことから始まり、徐々に一人ひとりから様々な身体の動きが生まれました。普段見られない利用者のみなさんの表現に、職員さんたちも驚いていた様子でした。

〔施設情報〕
施設名：磯子区障害者地域活動ホーム
運営法人：NPO 法人新
施設種別：障害者地域活動ホーム
所在地：横浜市磯子区磯子 2-29-51
URL:<http://npo-arata.yokohama>

写真：金子愛帆



地域に出て分かること

この日は月一回の特別養護老人ホームでのボランティア活動に同行させていただきました。利用者や入居者のみなさんが一緒に風船バレーやカラオケを楽しみます。この他にも地域のボランティアサークルと一緒に創作などを行なう活動もあるそうです。「地域に出ていくことで、お互いの理解が深まる」と所長の宮原義行さんは話しました。楽しそうなみなさんの顔を見て、一緒に活動することで初めて通じ合うことがあると、実感しました。

〔施設情報〕
施設名：フィルイン
運営法人：社会福祉法人すずらんの会
施設種別：障害福祉サービス事業所（生活介護）
所在地：相模原市南区麻溝台 1-12-17 第二キタミビル 1階
URL:<http://www.suzuran.or.jp/>



その人の世界を広げる

Dayz かしこは、2017年に開所した医療的ケアを必要とする成人のみなさんが通う施設です。管理者である門原美智子さんが美術を学んでいたこともあり、アート活動を取り入れていきたいと考えています。「活動を通して、世界の文化や他人とのかかわったりするきっかけになれば。」という門原さんの言葉から、アートによってその人の世界が広がることへの期待が感じられました。

〔施設情報〕
施設名：Dayz かしこ
運営法人：有限会社かしこ
施設種別：障害福祉サービス事業所（生活介護）
所在地：横須賀市長澤 1-3-15
URL:care-kashiko.com

ヒアリング結果報告

ここでは、調査研究事業として行った、神奈川県内の障害福祉サービス事業所 18 団体、文化芸術団体 2 団体、自治体 8 団体に対してのヒアリング結果をお伝えします。(調査期間：2018 年 5 月 25 日～2019 年 3 月 13 日) 分野に関わらず、情報共有の場や相談できる関係など、つながりが必要とされていることがうかがえます。福祉と文化芸術を横断するようなネットワークの構築を今後も続けていきます。

(● = 障害福祉サービス事業所 ▲ = 文化芸術団体 ■ = 自治体)

.....

< 現在取り組んでいるまたはこれまで取り組んできた活動 >

- 施設内で企画し、公共施設を借りて発表会を行ったことがある
- 普段から絵などを描いている人の作品を集めて作品展を開催した
- 外部講師が入ることで、職員が一步引いた距離から関わることができ、
利用者の様子をしっかりと見ることができる
- ▲地域の障害福祉サービス事業所や高齢者施設などでのアウトリーチ事業を展開している
- 地域の障害福祉サービス事業所と一緒にダンスのワークショップを開催している

< 今後の課題、要望 >

- 利用者の生活を豊かにするきっかけとなったり、利用者・職員双方にとって発見となるような機会があるとよい
- 文化芸術施設に出かけて休憩したいときに、場所などを気軽に相談できるとよい
- 文化芸術に興味を持っている人の活動の膨らませ方ついて気軽に相談するところがあるとよい
- 地域に出ていく、または地域住民に来てもらう機会をつくりたい
- ▲ネットワークの構築と、活動の継続が課題
- 情報共有の場が必要

.....

ヒアリング先一覧

●障害福祉サービス事業所 (18 団体)

studio トネリコ (寒川町)/ アール・ド・ヴィーヴル (小田原市)/ えのきの里、障害者総合福祉施設 アガペセンター (以上座間市)/ 生活介護 Jump(厚木市)/ アトリエそらのいる (鎌倉市)/GALLERY COOCA & CAFÉ(平塚市)/ コミュニティセンター・フレンズ、Dayz かしこ、ぶどうの木 (以上横須賀市)/ 生活介護支援事業所 のびやか (相模原市)/ アートかれん、磯子区障害者地域活動ホーム、地域活動支援センター ひふみ、まどか工房、みどり福祉ホーム、リエゾン笠間、リバーサイド泉Ⅲのぞみ・ひまわり、YSK 作業所 (以上横浜市)

▲文化芸術団体 (2 団体)

相模原市民文化財団 (相模原市)/ 川崎市文化財団 (川崎市)

■自治体 (8 団体)

小田原市 (文化政策課)/ 横須賀市 (障害福祉課、文化振興課)/ 相模原市 (障害政策課、文化振興課) / 横浜市 (障害福祉課、文化振興課)、障害者スポーツ文化センター横浜ラポール

障害福祉と文化芸術を考える勉強会



今年度も、多種多様な立場から障害福祉、文化芸術を考えている方々をゲストに、全4回の勉強会を行ないました。

アーティストやコーディネーター、障害福祉や文化芸術関係者など、さまざまなバックグラウンドを持つ方にご参加いただきました。

ここからは、その勉強会の様子と、平成31年3月に行なわれた報告会の様子をご紹介します。



障害のある人の表現に出会う場

ゲスト：中畝常雄 (NPO 法人スペースナナ、「ココロはずむアート展」書記)

石井将隆 (カプカプ川和施設長、「ココロはずむアート展」実行委員長)

展覧会を地域の活動へ

第1回目は、横浜市緑区、青葉区、都筑区にある障害者施設とつながって開催されている「ココロはずむアート展」。展覧会の発起人である中畝常雄さんと、参加施設であるカプカプ川和の施設長で、展覧会の実行委員長でもある石井将隆さんにアート展についてお話をうかがいました。まずは中畝さんに、アート展が始まるまでの経緯をお話いただきました。コミュニティカフェ「スペースナナ」を運営している、NPO法人スペースナナに所属している中畝さん。生きづらさを抱えた人たちの問題を考える活動をしているスペースナナの中で、日本画家であり、障害を持つお子さんの父親でもあった中畝さんは、ギャラリー担当兼障害者にまつわる事業を担当することになりました。「何ができるかわからないけどやってみよう」と始めたのが、障害のある方の作品を集めたアート展でした。

初めの2回は、既にアート活動をしている施設から作品を借りての開催でしたが、そのうちに地域の福祉施設職員や、知り合いの障害児の親からも「うちも出展したい」という声が集まるようになりました。地域の方たちと一緒にやりたい、と考えた中畝さんは、ご自身の活動範囲である青葉区、都筑区、緑区の3区の障害者施設に声を掛けて、3回目のアート展を行ないました。「これでやっと地域の活動になった」と感じたそうです。最初は5つの団体、約20名の作家から始まり、第8回を迎える今年は、10団体、約90名の作家が参加するまでに広がりました。展示会場も5カ所となり、遠くに出かけることが難しい出展作家とその家族にも、見る機会が広がったそうです。「来てもらうのを待つのではなく、こちらから出かけていってみなさんの近くでやるのが大事」と実感しているそうです。

“その人”を伝えたい

アート展を通して、施設の職員さんから作品が生まれる背景を聞かせてもらう機会が増えるうちに「この話をいろんな人に伝えたい」と思うようになったという中畝さん。同時に、作品の商品化について相談していたアドバイザーから「彼らの魅力を売る事を考えたら」と言われたことも重なり生まれたのが「作家カード」でした。作者の顔写真とプロフィール、出展作品以外の写真が載っているカードを、作品と並べて貼ることで、作者の人柄も伝わるようにしました。作成したカードは本にまとめ、間もなく出版するそうです。

アート展には第3回から参加しているカプカプ川和の石井さんは、「障害のある人から出てきたものを面白いと発見し、作品に繋げるには職員の感性が欠かせない」と話します。元々絵を描くことが活動の柱にあったカプカプ川和。その人らしくいられる場所を作ることを心がけているそうです。「アートとは、その人が中心の世界が展開するという。その人自身を見なければ」と、石井さん自身の考えを話してくださいました。

後半のグループディスカッションでは、自分の活動に取り入れたいという感想を共有したり、気兼ねなく作品を見られる展示があることで創作にも影響が及ぶのでは、といった美術との関わり方について考えを深める議論が持ち上がりました。

今後は表現を通して障害のある人と地域の人の方がより近づき、「〇〇さん」と名前で認知されるような関係ができれば、と中畝さんは展望を話します。「面白い」という気付きがゆるやかにつながり、広がっていった「ココロはずむアート展」。障害のある人の表現を地域に届ける活動についてのお話を聞くことで、障害の有無に関わらず人が表現すること、人に伝えることを改めて考える機会となりました。

日時：2018年11月5日(月) 19:00～20:30

場所：スペースナナ(横浜市青葉区あざみ野1-21-11)

参加者：15名

中畝常雄(なかうね・つねお)

1950年埼玉県生まれ。76年東京芸術大学大学院日本画修了、模写や修復に携わる。84年に長男誕生、脳性マヒの診断を受ける。横浜地域自主訓練会「麦の会」などに参加、横浜障害児を守る連絡協議会副会長。2010年よりスペースナナに参加。2011年よりココロはずむアート展開催。自身も個展などを開催、絵画教室講師も務めている。

石井将隆(いしい・まさたか)

地域作業所「カプカプ」(横浜市旭区)の開所当初より縁あって運営委員として関わる。その活動を横目で見ながら都内の精神障害者の作業所職員として作業指導、就労支援等に携わる。2010年4月地域作業所「カプカプ川和」(横浜市都筑区)開所に伴い所長に就任、右往左往しながら現在に至る。1964年、青森県むつ市生まれ。



身体を通した対話

ゲスト：砂連尾理（ダンサー・振付家）

障害のある人との出会い

最初に、参加者の皆さんに名前と今日の意気込みを聞きました。障害者施設で働いていて、ダンス好きな利用者さんがいるという方、自分自身がダンスに興味がある方など、様々な背景を持つ方が集まってくださっています。

砂連尾さんが障害のある人とダンスを始めたきっかけは、2007年にさかのぼります。障害のある人が舞台表現活動を行なう「エイブルアート・オンステージ」というイベントに参加していた「循環プロジェクト」という企画で、障害のある人と一緒にダンス作品を作るために招かれたことでした。実際にその作品の映像を見ながら、障害のある人と一緒に、どのように身体やダンスを考えていったのかを話していただきました。作品を作る過程で、「障害のある人に関わっていく中で、芸術と福祉と教育が手を組んで、どう社会を豊かにしていくか」を問題意識として持つようになったという砂連尾さん。そのための一歩として「ダンサーとして、まずそこにいる人たちと身体を通して何かを感じることから始める」というスタンスは、今も変わらず続いています。

腹を探る、腑に落ちる

そこにいる人たちと身体を通して何かを感じる、とはどういうことか。実際に参加者の皆さんと身体を動かしてみます。まずは、ポーズと共にゆっくり呼吸をする「立禅」をします。参加者からは「気持ちよかった」「眠くなった」という感想が聞かれました。今度はペアになって、相手の呼吸に合わせるワークです。一人が座り、一人が経った状態で、立っている人が座っている人の腕をつかんで押します。押された方は、力を受け止めようとしますが、みなさんバランスを崩していました。「障害を考えるとこういうこと。普段と違うエネルギーが加わると、人は対応できない。どう相手と力のやり取りをするか。」と砂連尾さん。言葉でのコミュニケーションを用いない人と、何かを伝えたり受け取ったりするときに重要なのが「腹を探る」そして「腑に落ちる」という感覚だと言います。お互いの呼吸を読み合い、その人の身体の法則を揺らし合うなかで、何かが通じたという感覚が持てる距離を探る。ダンスを通して、砂連尾さんと障害のある人との間で起こっていることが垣間見えました。

続いて「相手が嫌がるだろうなと思うことをやってみる」という、ちょっと刺激的なワークをしてみます。先程のペアで、皆さん戸惑いながらも相手をつねったり、くすぐったり、膝の上に座ってみたり。それぞれのペアの動きを見て、周囲からは思わず笑い声があがりました。「障害のある人の身体にこの身を合わせようとすると、意外と私たちの身体は自分の価値観に強固にとらわれている。その強固さをどうやって外すかということにダンスがあると感じる」と砂連尾さんは話します。

最後に皆さんで感想を共有しました。「言葉ではなく身体が触れ合うことで、生まれるコミュニケーションの面白さを実感した」「嫌がることを考えるということは、相手に興味を持つことなのだと感じた」とそれぞれ気づきがあったようでした。

コミュニケーションの中で起っている、伝わる、受け取るということ。ふだんは言葉を重視しがちですが、実は身体感覚で生まれる対話がたくさんあるのだと気づかされました。



日時：2019年1月11日（金）14:00～16:00

場所：杜のホールはしもと多目的室

（相模原市緑区橋本3-28-1 ミウィ橋本8階）

参加者：9名

砂連尾理（じゃれお・おさむ）

プロフィールはP.13を参照



地域のつなぎ手、担い手

ゲスト：原島隆行（横浜市六角橋地域ケアプラザ 地域交流コーディネーター）
中村麻美（地域活動支援センター ひふみ 施設長）

それぞれの取り組みについて

“地域とつながる”というキーワードは、福祉や文化芸術の分野に関わらず、よく耳にするようになりました。なぜ地域とつながるのか、つながった先にあるものは何か。横浜市神奈川区の六角橋地域の福祉拠点となる「六角橋地域ケアプラザ」で、地域交流コーディネーターをしている原島隆行さんと、同じ地域で精神障害のある人の生活を支えている「ひふみ」の中村麻美さんと一緒に、改めて考えました。

まず原島さんに、地域ケアプラザという場所と、ご自身の役割について説明していただきました。ケアプラザとは、年齢や障害の有無に関わらず、地域に暮らす人たちが安心して生活するための様々な取り組みを行っている施設です。その中で、原島さんは「地域交流コーディネーター」という、地域住民同士のつながりを作り、サポートする役割を務めています。「日常では交わることが少ない人や世代を企画等を通じてつなぎ、交流を生み出します」と、具体的な取り組みを紹介していただきました。

「地域カフェ」は、地域に元々ある施設の場所を借りて、それぞれの場所で月1回ボランティアの方が開くカフェです。ボランティア同士や、近所に住む方々が交流する場となっています。また、カフェを開く前には、地域にあるコーヒーチェーン店の店員さんが、ボランティアのみなさんにコーヒーの淹れ方を教えて下さるようで、いろんな形で地域の人に関わっています。また、神奈川大学の学生と協働する「まち×学生プロジェクト」の中で、認知症についての理解を促進する取り組みをしたり、ひふみの利用者のみなさんからの質問で構成されたすごろくで遊んでみる「すごろくワーク」など、自然な形で普段は関わる事が無い方たちが、お互いのことを知る機会作っています。

続いて、ひふみにおける地域とのつながりについて、中村さんに伺いました。ひふみについて「精神障害に限らず、何らかの生きづらさを抱えている人が集まる場所」と話す中村さん。利用者さんを含めて、様々な人を受け入れています。先程原島さんから紹介があった「地域カフェ」の会場の一つにもなっています。「場所を貸しているだけといえばそうだが、ボランティアのみなさんと挨拶を交わすことを楽しみにしている利用者さんもいて、ひふみの場の広がりにつながっている」と中村さんは話します。

地域とつながるために必要なことは

そんなお二人に、なぜ地域へ出ていくのか／受け入れるのかを伺いました。原島さんは地域に出かけていく理由を、「人も情報も、待っていても集まらない」と話しました。

坂や階段が多い地域であるため、高齢者やベビーカーが必要な子ども連れの方が来れないという地理的な問題もありますが、「こちらから足を運ぶことで誠意を見せ、信頼関係を築く」と考えているそうです。

中村さんは地域とのつながりを受け入れることが、利用者のみなさんの支えになると言います。「辛さや苦しみを抱えるのは自分だけではないと気づくと、利用者が人を支える立場になることがある。それは外からの空気を入れることで起こる」と施設を開くことで生まれる変化を実感しているそうです。

つながるための一歩を踏み出すためには何が必要でしょうか。原島さんは「支援者も当事者も同じステージに立って、楽しいと思うこと」と話します。そうすることで、取り組みが長続きし周囲を巻きこみながら広がっていくと言います。中村さんからは「おせっかいさ」という答えが。「目の前にいる人の、その先にいる人」のことまで考えることが、施設の外へ意識を向けるきっかけと話します。

最後に会場から質問を受け付けます。具体的な場のづくり方や、美術館との連携の可能性などの質問が挙がりました。参加者それぞれが、自分が関わっている現場のことを思い浮かべながら、話を聞いていたようでした。楽しみながら地域と一緒に活動が続いているお二人の言葉に、背中を押されるような回となりました。

日時：2019年1月23日（水） 19:00～20:30
場所：S T スポット（横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビルB1）
参加者：17名

中村麻美（なかむら・あさみ）

2005～2012年まで世田谷パブリックシアターの学芸に所属し、劇場内・地域におけるワークショップ活動を主に担当。2012年より横浜市神奈川区にある「地域活動支援センターひふみ」で精神障害のある人たちの日中活動の場を運営。劇場勤務時代に体得した、地域の様々な人との関わりや場の作り方などを活かしつつ、日々試行錯誤している。

原島隆行（はらしま・たかゆき）

日本社会事業大卒。2014年より横浜市神奈川区にある横浜市六角橋地域ケアプラザ地域活動交流コーディネーターとして勤務。人々が集まる拠点づくり「地域カフェ」の立ち上げや地域と大学生が協働する「まち×学生プロジェクト」、近隣公共施設が協働する「Route 7プロジェクト」等、福祉の視点から「まちづくり」を実践するソーシャルワーカー。



障害者と芸術鑑賞

ゲスト：林建太（視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ 代表）

関淳一（横浜美術館 首席エドゥケーター）

“鑑賞する”とはどういうことか

「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」の林建太さんは、障害の有無に関わらず多様な人たちが対話しながら美術鑑賞をする場づくりを2012年から続けています。2017年には演劇の手法を取り入れた音声ガイドを作る「きくたびプロジェクト」を横浜美術館で行ないました。その時のこれまでの活動から見てきた“見る”ということについて、横浜美術館の関淳一さんも交えてお話をいただきました。

林さんが活動を始めたきっかけは、視覚障害のある友人と美術館に出かけ、展示作品の説明した時に言われた、「おもしろくない」という一言でした。それは“教える／教えられる”という関係性によるものではないか、と林さんは考えました。そこで色や形の説明に加えて、「私はこう思う」という主観的な感想を伝えたところ、面白さが伝わった感覚がお互いに持てたそうです。説明ではない言葉を交わすことで伝わる面白さを、もう少し考えてみたい、と思ったことが、団体の立ち上げに繋がりました。

さらに林さんは、活動の中で“鑑賞する”という行為についての考えを深めていきます。対話しながら鑑賞する際には、周りに流れている時間や空気などが鑑賞者の経験に影響するという、身体と環境の関係に気がきました。また、目で事実と捉えた情報を伝えるだけでは、作品の説明としては不十分であり、見た人のイメージなどの要素が重要となることから、“フィクションとか創造すること”の重要性を感じるようになりました。その内に、見るという行為にはゴールを重視する“まっすぐモード”と、プロセスを重視する“ブラブラモード”があり、ワークショップで生まれている空気は“ブラブラモード”であると考えました。モードに名前をつけてみることで、個人を障害の有無で区切るだけでなく、個人がどんなシチュエーションでもものを見るか、という環境ごとに区切る大事さに気づきました。「そもそも障害のある人は日常生活に介助者などの他者が介在しながら行動することが多い。まっすぐモードは実現しやすいが、ブラブラモードに移行したり、モードを行き来することが難しいのではないかと林さんは話します。

「きくたびプロジェクト」から生まれる鑑賞体験

こうした鑑賞への気づきと、ワークショップという一過性の経験ではなくメディアとして形を残したいという想いが「きくたびプロジェクト」に繋がりました。2017年、横浜美術館で3人の俳優（大石将弘、北村美岬、山内健司）と一緒に、美術館の作品や環境、そこにいる人々、そしてフィクションが入り混じりながら美術館という環境を使った15の音声作品が出来上がりました。

その中の1つ、ある画家が写っている写真についての音声、会場のみなさんと聞いてみました。鑑賞者は画家の半生についての語りに従って、本来の展示順路とは異なる道筋を実際に歩くことで、作品との出会いを体験するという内容です。

この音声作品について、横浜美術館の関淳一さんは「作品を鑑賞するということの本質へ至る誘いなのではないか」と感じたそうです。美術館の展示では、美術史的な意味合いなど、学芸員が研究した成果に沿って見る順路が決まっています。しかし、作品に対峙するときには研究対象であるという目線以上に、今まさに自分の前にある作品自体を鑑賞者が体当たりで対話する体験が重要だと言います。「解説などを聞いて分かった気になってしまいがちだが、身体を動かしながら作品の物語にイメージを働かせることで、生身の作品に出会うということが鑑賞の極意」と、「きくたびプロジェクト」での鑑賞体験がもたらすことについて話しました。

最後に美術館という公共文化施設において、今回のように様々な取組み受け入れることで生まれる創造性について話題が移りました。「公平性を重視し、特定の方向に偏ることが難しい美術館では、外部の団体と協働することで新たな可能性につなげることができる。」と関さんは話します。

鑑賞という、一見受け身と思われる行為が、実はとても能動的でクリエイティブな行為であることに気づかされるお話しでした。また、その気づきが、障害のある人や他分野との協働で生まれたということから、さまざまな視点がつながる可能性を感じました。

日時：2019年2月20日（水）19:00～20:30

場所：STスポット（横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビルB1）

参加者：21名

ゲストプロフィール：

林建太（はやし・けんた）

1973年東京都生まれ。95年より在宅ヘルパーとして身体障害者のサポートに携わる。2012年より「視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ」発足。横浜美術館や東京都写真美術館をはじめとした全国の美術館や学校で、視覚障害者と晴眼者が言葉を介して一緒に美術鑑賞をするワークショップを行う。17年には横浜美術館の協力のもと、美術館や作品にまつわる音声作品を、演劇の俳優とともにつくる「きくたびプロジェクト」を実施した。

関淳一（せき・じゅんいち）

1986年から横浜美術館の開設準備室に勤務。1989年の開館より「創る」ことをベースとした美術館教育に携わる。2009年から横浜美術館の教育普及を統括。様々な人を対象とした教育活動の一環として視覚に障がいのある人を対象としたプログラムにも取り組む。2018年からは、横浜美術館首席エドゥケーター。

地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業報告会

地域にひろく、地域でつむぐ

この報告会では、アーティスト、福祉施設職員をゲストに本事業の活動報告と福祉施設での芸術家による取り組み2事例を紹介しました。また、後半には東京都市大学都市生活学部准教授の坂倉杏介さんから、福祉施設や文化施設が地域に開いていくことについてお話しいただき、今後の可能性や展望を考える時間となりました。



ゲスト：安武宗吾（磯子区障害者地域活動ホーム 職員）、**入手杏奈**（ダンサー・振付家）
今村憲一（リエゾン笠間 主任）、**小野亜斗子**（ドゥイ（造形ユニット））
坂倉杏介（東京都市大学都市生活学部 准教授）



まずはSTスポット横浜より、今年度の事業について報告を行ないました。続いて、福祉施設での芸術家による取り組み紹介に移ります。まずは、磯子区障害者地域活動ホームでのダンスの取り組み(p.20参照)について、職員の安武宗吾さんとダンサーの入手杏奈さんにお話を伺いました。安武さんからは、内容のイメージのつかないことから実施前は職員内で戸惑いがあったというお話がありました。一方入手さんも、障害者施設でのワークショップは初めてだったため、何ができるか想像がつかなかったそうです。お二人とも、実施してみるとその不安は覆されたそうです。

次にリエゾン笠間での美術の取り組み(P.10参照)について、職員の今村憲一さんとドゥイの小野亜斗子さんに、お話を伺いました。お二人とも、言葉での意思疎通が難しい参加者が、パンの素材に触れることで表情が変わるなど、ふだんとは違う感覚を実感している様子を感じたそうです。ふだんは子どもたちとの関わりが多い小野さんにとっては、コミュニケーションに対する考えに変化を与える機会ともなりました。

後半は、コミュニティづくりについてが専門である坂倉杏介さんにお話をいただきました。分野ごとに分断されているという現在のコミュニティの課題と、多様な人のつながりが生まれることで起こる面白さについてお話しいただくなかで、アートの可能性についても触れられました。また、一つ一つの取り組みは小さくても、外部に開いている人々が関わることで、地域全体が変わると話しました。

最後に登壇者全員で、それぞれの活動に立ち返って、地域や多様な人と混ざり合うことについて考えました。障害のある人と文化芸術が関わることで起こることについて、考えを深める機会となりました。

日時：2019年3月7日（木） 19:00～20:30
 場所：障害者スポーツ文化センター横浜ラポール 大会議室（横浜市港北区鳥山町1752）
 参加者：23名

ゲストプロフィール：

入手杏奈（いりて・あんな）
 幼少よりクラシックバレエを学ぶ。近年はソロ作品の発表や、多数の音楽PVへの振付・出演を行う。2014年「第1回ソロダンスフェスティバル2014」最優秀賞受賞。現在、桜美林大学にてダンス科目の非常勤講師を務める。

安武宗吾（やすたけ・そうご）

1978年神奈川県生まれ。高2の春、山手美術セミナーと出会い、老若男女多様な価値が集まるコミュニティの魅力を知る。車椅子制作の技術職を経て、2011年よりNPO法人新の職員として勤務。メンバーとの協働をテーマに模索中。

小野亜斗子（おの・あとこ）

プロフィールはP.09を参照

今村憲一（いまむら・けんいち）

1972年神奈川県出身。高校卒業後販売職で8年ほど勤め、介護業界に転職。高齢者介護（訪問介護や認知症対応型グループホーム）などを経験し、障害者支援の世界へ。現在勤続11年目を迎えるリエゾン笠間では、主任職を務める。

坂倉杏介（さかくら・きょうすけ）

東京都市大学都市生活学部准教授。コミュニティの形成過程やワークショップの体験デザインを研究。「芝の家」の運営などを通じて港区のコミュニティ活性化事業を手がけるなど、コミュニティ形成プロジェクトに多く携わる。NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事。



障害と身体を めぐる旅

2018

障害と身体をめぐる旅 2018

編集／田中真実、川村美紗

撮影／金子愛帆（P.06-09、P.12-15）

デザイン／加納美海

テキスト／川村美紗、田中真実

発行／認定 NPO 法人 S T スポット横浜
〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸 1-11-15 横浜 S T ビル地下 1 階

発行日／2019 年 3 月 29 日

平成 30 年度かながわボランティア活動推進基金 21・協働事業負担金「地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業」
認定 N P O 法人 S T スポット横浜、神奈川県福祉子どもみらい局福祉部障害福祉課、神奈川県国際文化観光局文化課

本事業についてのお問い合わせ
〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸 1-11-15 横浜 S T ビル地下 1 階
TEL：045-325-0410 FAX：045-325-0414 MAIL:community@stspot.jp
<https://welfare-stspot.jimdo.com> 福祉分野における芸術文化活動の基盤整備事業

認定 N P O 法人 S T スポット横浜
地域連携事業部スタッフ
ディレクター／小川智紀 田中真実 アシスタントディレクター／高荷春菜 池田友実 加納美海 川村美紗
劇場スタッフ
館長／佐藤泰紀 館長補佐／岩田浩 制作／萩谷早枝子 シフトスタッフ／島崇 田中美希恵
<http://www.stspot.jp>

